

中国・陝西省におけるレッドツーリズム（紅色旅游） について：西安及び洋県を中心に

一 戸 信 哉

はじめに

レッドツーリズム（紅色旅游）とは、中華人民共和国で提唱されている観光の概念で「共産主義の歴史を理解する旅」といわれる。本稿の目的は、このレッドツーリズムの対象として挙げられている中国の拠点について、日本人がダークツーリズムの視点で捉え直し、中国の人々とともに、独自の視点を保ち、中国の近代史を現地で学ぶことができるか、陝西省を題材に検討することにある¹⁾。

「共産主義」の歴史は中国だけにあるわけではないが、中国でレッドツーリズム（紅色旅游）といった場合には、中華人民共和国の建国前後の歴史をめぐる旅ということになり、自ずと中国共産党の「正当性」を強調する内容をめぐる形になる。

日中戦争で中国共産党がどんな役割を果たしたのかは、さまざまな解釈がありうるところで、井崗山や延安などの中国共産党の拠点となった場所は間違いなくレッドツーリズムの拠点となりうるが、たとえば南京虐殺に関連する拠点、たとえば南京大虐殺記念館（侵華日軍南京大屠殺遇难同胞纪念馆）が、レッドツーリズムとしてどんな意味があるのかは、共産党の解釈とそれ以外の人々の解釈が、同じとは限らない。南京大虐殺記念館や七三一部隊記念館（侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館）は、レッドツーリズムの拠点の一つに位置づけられているが、中国政府の「立場」が示されているにすぎないと見る日本人も少なくないだろう。中国各地での「悲劇」と中国共産党の活動はどのように関連しているのか。彼らは勝利を実現した「英雄」なのか、犠牲になった仲間（同志）たちなのか。こうした点を冷静に見ていくと、どこかで「戦争や災害をはじめとする人類の悲しみの記憶を巡る旅」であるダークツーリズムと接続できることになる。近現代の中国大陸における「人類の悲しみの記憶」は、多くの場合、日本が関わりを持っており、日本の近現代と分かちがたく結びついている。中国政府が「共産主義の歴史を学ぶ旅」と位置づけている拠点をめぐり、それについての中国政府の意義付けを探っていくことにより、一定の割合で「人類の悲しみ」との接点を見出すことになるだろう。

本稿では、2018年9月に実施した中国陝西省での調査に基づいて、陝西省におけるレッドツーリズムの現状と、日本人訪問者にとっての意義を考えてみたい²⁾。

1. レッドツーリズムの概要

レッドツーリズムは、2004年中国政府が「レッドツーリズム発展計画要綱（紅色旅游発展企劃綱要）」で提唱したものである。政府がこの計画を発表してから15年ほどが経過、中国国内では一定の知名度もあり、研究成果も見られるが、国際的にはさほど知られているとは言えない。日本国内でもいくつかの研究成果が見られるに過ぎず、レッドツーリズムの知名度は低い。

レッドツーリズムとはなにか。その定義についてのさまざまな論者の定義の違いについては、百武仁志が2015年に分類を試みている³⁾。これによると、レッドツーリズム発展計画要綱で政府が定義しているのは、「中国共産党が指導した人民の革命と現代中国建設時期に功績の偉大な功績の形成した記念の地、記念物、革命の歴史、革命の業績と革命精神を内包し、さらに観光客受入れのための組織をし、現代中国を追想する観光活動」であるという。つまり、中国共産党による革命の歴史をたどる史跡を巡るという観光であるのだが、「観光客受け入れのための組織」というところに、観光産業の発展を意図したニュアンスが現れている。百武の紹介する中国の諸論文による定義でも、「革命根拠地や記念地を旅行資源として、観光客を引き付ける旅行商品」という表現が登場している。

中国国内での論者によるさまざまな定義を受けて百武が提案しているのは、「中華人民共和国を成立させるために起こった革命に由来する地域を観光するもの」というもので、観光の成果として「革命精神を学び、中国式愛国主義教育を受ける」とする。日本及び諸外国から中国を訪れる人々の中で、「中国式愛国主義教育」を受けようという人が多いとは思えず、レッドツーリズムの主な対象は実質的には中国国民になる。しかし、「革命に由来する地域」を中国政府がどのように位置づけて、「愛国主義教育」の拠点にしようとしているかを客観的に観察することができるならば、日本からの訪問者の関心の対象にもなりうるし、ダークツーリズムの手法が妥当する範囲も見出しうる。

2. レッドツーリズムの起源と整備状況

2004年に中国政府は、レッドツーリズム（紅色旅游）を提唱しはじめるが、これに相当する活動がそれ以前になかったわけではない。2008年に張恩華は、「長征の足跡をたどる」活動が、1950年代以降、断続的ながらも重要な活動として位置づけられ、多くの人々が実際にそれらの場所をたどる活動を繰り返してきたことを明らかにしている。それらの営みの延長線上に、現在の中国のレッドツーリズムも位置づけられるという⁴⁾。

張恩華によれば、1950年代に、「長征の足跡をたどる」活動にはじめに取り組んだのは、長征の時代を知らない、中華人民共和国成立前後に生まれた若者であった。彼らは、「長征の時代に間に合わなかった」が、長征の足跡を実際にたどることにより、「長征の精神

を体得し、革命的意思を鍛えていった」という。この動きはそのまま 1960 年代の文化大革命に接続し、紅衛兵の活動の一形態として継承されていった。当時の紅衛兵の多くが北京に向かったのと同時に、文革に参加した若者の多くは、革命の聖地である延安にも向かっている。「長征のあとをたどる」活動は、紅衛兵に参加した若者たちの活動としても、非常に大きな「肉体的試練」を伴うもので、革命に対する忠誠心をよく示すものであったという⁵⁾。その後、交通手段が発達するものの、地形が険しく気候も厳しい地域が多く、依然として「長征の足跡をたどる」には困難が伴い、「長征の足跡をたどる」意義は強調され続けた。ただ、1990 年代後半に入ると、革命についての「清く正しい」倫理観はやや緩和され、「紅色」をモチーフにしたレストランが開業したり、「紅色經典」と呼ばれる模範文芸作品がリメイクされて世俗化(革命に参加する男女の恋愛が描かれるようになった)したり、といった動きが見られた。こうした世俗化と観光産業の発達が結びつく中で、レッドツーリズムが生まれることになる。

現代中国における「観光」の歴史はさほど長くはない。李明伍によると、改革開放以前に観光市場は基本的に存在しなかった。1980 年代に入って、国際観光客を受け入れるようになるが、それもしばらくは、「外国人接待のための中国国際旅行社、海外の中国系の人たちの接待のための中国旅行社、海外の青年との交流のための中国青年旅行社」が国際観光客の 8 割を受け入れている状態が続き、いわば、政治の手段としての観光という性格が維持されていたという⁶⁾。民間企業による活発な観光事業が展開されるのは、1990 年代後半から 2000 年代にかけてということになる。レッドツーリズムが提唱されはじめた 2004 年は、一般的な国内観光に人々が飽きてきた時期ではない。張恩華は、2003 年の SARS 流行との関係を指摘している。すなわち、SARS の流行により、海外からの観光客の流入が大きく落ち込む中で、信頼回復の途上において、内需拡大による「時間稼ぎ」の手段の一つとして、レッドツーリズムが期待されたという⁷⁾。その意味では、中国のレッドツーリズムは、国家の政策誘導としてはじまった側面が強い。「レッドツーリズム」という、ややマニアックな観光に、中国国内の人々の関心が自然に集まったのではなく、中国政府が中国共産党の「正史」を若い世代に対して「観光」の形で教育し、それによる経済効果を狙ったものと見るべきであろう。実際、レッドツーリズムを主要な拠点となる旧革命根拠地の有力産業に成長させることが目標として掲げられている⁸⁾。

レッドツーリズムの拠点は実際、どの程度整備されているか。2004 年の「レッドツーリズム発展計画要綱」では、12 カ所の重点紅色旅游区、30 本の紅色観光ルートを整えるという目標が掲げられている。2019 年 1 月現在、レッドツーリズムについての情報を提供するポータルサイトの一つである「中紅網」を確認してみる⁹⁾。

重点紅色旅游区	主要な観光地
滬浙紅色旅游区	上海
湘贛閩紅色旅游区	韶山・井冈山・瑞金
左右江紅色旅游区	
黔北黔西紅色旅游区	遵義
雪山草地紅色旅游区	
陕甘寧紅色旅游区	延安
東北紅色旅游区	松花江・鴨綠江流域・長白山
魯蘇皖紅色旅游区	皖南・蘇北・魯西南
大別山紅色旅游区	山西・河北
太行山紅色旅游区	
川陝渝紅色旅游区	
京津冀紅色旅游区	北京・天津

紅色観光ルート

1. 北京－遵化－樂亭－天津	2. 北京－保定－西柏坡
3. 上海－嘉兴－平陽	4. 南京－鎮江－句容－常熟
5. 泰州－盐城－淮安－徐州	6. 南昌－吉安－井冈山
7. 贛州－瑞金－于都－会昌－長汀－上杭－古田	8. 井冈山－永新－茶陵－株州
9. 韶山－寧乡－平江	10. 南寧－崇左－靖西－百色
11. 貴陽－凱里－鎮遠－黎平－通道－桂林	12. 貴陽－遵義－仁怀－赤水－泸州
13. 成都－松潘－若尔盖－迭部－宕昌－岷县－临夏－蘭州	14. 成都－雅安－石棉－泸定－康定
15. 昆明－会理－攀枝花－冕寧－西昌	16. 蘭州－定西－会寧－静寧－六盤山－銀川
17. 西安－洛川－延安－子長－榆林－綏德	18. 黄山－婺源－上饒－弋陽－武夷山
19. 黄山－績溪－旌德－泾县－宣城－芜湖	20. 濟南－濟寧－枣庄－临沂－连云港
21. 武漢－麻城－紅安－新县－信陽	22. 合肥－六安－金寨－霍山－岳西－安庆
23. 太原－大同－灵丘－涑源－易县－涿州	24. 石家莊－西柏坡－涉县－長治－晋城
25. 沈陽－錦州－葫蘆島－秦皇島	26. 四平－吉林－敦化－延吉－白山－临江－通化－集安
27. 哈爾濱－阿城－尚志－海林－牡丹江	28. 重慶－广安－儀陇－巴中
29. 海口－文昌－瓊海－五指山	30. 張家界－桑植－永順－吉首－铜仁

以上の通り、12カ所の重点紅色旅游区（レッドツーリズムエリア）、30本の紅色観光ルートが掲載されている。本稿との関係で言えば、陝西省の一部が、陝甘寧紅色旅游区に組み込まれており、かつて共産党の拠点であった延安が含まれている。また観光ルートとしては、17の「西安－洛川－延安－子長－榆林－綏徳」ルートがある。これも省都西安を起点に延安をめぐるルートと言ってよい。

このほか、北京、上海などの主要都市を拠点としたものがあるほか、観光ルートの25（沈陽－錦州－葫蘆島－秦皇島）や27（哈爾濱－阿城－尚志－海林－牡丹江）など、旧満州の東北地方には日本人の関心にこたえるルートもある。観光ルート25の葫蘆島については、「塔山阻撃戦紀念館」が拠点としてあげられているが、日本人には満州からの引揚げ港として知られている。引揚げ港としての痕跡はほとんど残っていないというが、日本人引き揚げ記念碑が唯一残っている。

このほか、100大レッドツーリズム拠点紅色観光地（經典景区）や重点愛国主義教育基地のリストが紹介されている。陝西省の經典景区としては、1. 西安市紅色旅游系列景区、2. 漢中市川陝革命紀念館、3. 延安市延安革命紀念地系列景区、4. 咸阳市旬邑县马栏革命旧址、5. 銅川市陝甘邊照金革命根据地旧址、重点愛国主義教育基地としては、延安革命紀年館、西安の八路軍西安弁事処紀念館、西安事変紀念館、陝西歴史博物館、西安半坡博物館、秦始皇兵馬俑博物館などが挙げられている。

今回、筆者らが2018年9月に実施した調査は、このうち西安市を中心とするエリアを対象とし、あわせて、陝西省南部の漢中市洋県に注目した¹⁰⁾。洋県は、朱鷺の生息地として知られており、新潟県佐渡市など、日本の朱鷺生息地との交流も盛んである。日本からのアクセスが容易な地域とはいいがたいが、朱鷺に関連して、日本のつながりも強く、この地域におけるレッドツーリズムの可能性を調査する意義はあると考えた。陝西省のレッドツーリズムの最重要拠点である延安は、西安から北に向かう洋県とは反対方向にあり、今回の対象から外れたが、辻田真佐憲によるレポートが、2016年に発表されており、ここから可能性を探ってみたい¹¹⁾。

3. 西安市内のレッドツーリズム

西安は、中国陝西省の省都であり、諸王朝の都「長安」であった都市である。現在の人口は、800万人を超え、内陸部の主要観光都市の一つといってよい。兵馬俑をはじめ、半坡遺跡、大雁塔、明代城壁、大清真寺（モスク）、鐘樓など、多くの観光スポットを有している。したがって、純然たる観光で訪れるにも適した都市であるが、同時にレッドツーリズムの対象とされる場所も挙げられる。今回の調査では、西安事件に関連した史跡を訪れた。

西安事件は、1936年12月に起きた蒋介石拉致監禁事件である。事件を起こしたのは、東北軍の張学良や十七路軍の楊虎城で、国共内戦の停止を蒋介石に訴えたが容れられず、不満を持ったことが原因とされている。捕えられた蒋介石に対しては、内戦の停止や政治犯の釈放などの8項目の要求が示された。蔣がこれを受け入れるまでの交渉過程は必ずしも明らかではないものの、蔣の妻宋美齡や共産党の周恩来も西安を訪れて蔣を説得し、合意に至ったとされている。この合意が契機となって、翌年の日中戦争における第二次国共合作が成立したとされる。したがって、西安事件は日中戦争の構図を決める重要な出来事であったと同時に、当時国民党軍に追い詰められていた共産党にとっては、危機を脱した歴史的な事件でもあった。のちの中華人民共和国成立の遠因ともいえ、レッドツーリズムの対象としても重要な意味を持つ。

3-1. 華清池及び五間廡

華清池は、西安郊外の温泉地で、唐の玄宗皇帝が楊貴妃のために建てた離宮がある。建物の多くは、後に建築されたもので、その意味での見どころは温泉跡だけなのだが、玄宗皇帝が楊貴妃に惑わされて政治を疎かにしたため、王朝が傾いたというストーリーが観光客の関心を惹くこともあり、観光スポットとしての人気は高い。楊貴妃のために作られた温泉跡「貴妃池」のほか、周辺にあるデフォルメされた楊貴妃や玄宗皇帝の像が多数設置されている。

本稿が目撃したいのは、この華清池が、西安事件の舞台でもあるという点である。1936年12月12日、華清池の敷地内にある「五間廡」という建物に滞在していた蒋介石を、拉致実行部隊が襲撃した。襲撃を知った蒋介石は裏山に逃げ込むが、最終的にはとらえられ、西安に送られることとなる。この襲撃の舞台となった「五間廡」はそのまま残っており、蒋介石の執務室や寝室、弾痕や割れた窓ガラス、当時の写真などの資料も展示されている。裏山で蒋介石が捉えられた場所は「兵諫亭」と呼ばれており、華清池とは別の入場料を支払って、山道を登って訪ねていくこともできる。



五間廡：蒋介石の寝室
(2018年9月筆者撮影)



五間廳：襲撃の際に割れたガラス
(2018年9月筆者撮影)

日本人の旅行客の中で、西安事件に関心を持つのは一部で、楊貴妃の入った温泉のほう
が人気があるかもしれないが、中国の人々の多くは五間廳を念入りに見学していた。中国
共産党の成立にとって、西安事件が持つ意味が大きいと、中国の多くの人々が理解している
からではないかと感じられた。唐代の史跡である華清池が、中国の近現代史の重大事件の
現場となり、レッドツーリズムの拠点となっていることで、観光の動線は設計しやすくなっ
ている。

3- 2. 西安事変紀念館

西安市内中心部の張学良の公館であった場所は、西安事変紀念館（中国語では西安「事
変」と表記されているので、ここではそれに従う）として整備されている。事件が起きた
後、延安から周恩来を筆頭とする中国共産党の代表団がここに宿泊し、張学良らと会談し
ている。中華人民共和国の建国の歴史を学ぶレッドツーリズムの観点からは、周恩来ら共
産党関係者ゆかりの場所であり、重要な拠点と位置づけられている。内戦の停止を含む、
蒋介石への8項目の要求について、蒋介石がこれを受け入れるまでには時間がかかるのだ
が、この場面で周恩来が登場するのは、蒋介石が校長をつとめた黄埔軍官学校で、周恩来
が部下として働いていたからであろう。



レッドツーリズムや愛国主義教育の「基地」
であることを示す看板。
レッドツーリズム拠点のほとんどで、この
ような看板を複数掲げている。
(2018年9月筆者撮影)



西安事変記念館建物外観
(2018年9月筆者撮影)



西安事変記念館内部。周恩来の滞
在した部屋が保存してある。
(2018年9月房文慧氏撮影)

2018年9月に実施した今回の調査では、スケジュールの都合により十分な調査を行うことはできなかったが、建物の外観部分の保存状態は非常によく、同時にレッドツーリズムの重要拠点として位置づけられていることを確認することはできた。入場料は無料だが、外国人観光客の姿はほとんど見られなかった。張学良は、事件後自ら軍法会議にかけられることを申し出て、死刑は免れるものの、50年間にわたって軟禁されることとなった。張は軟禁が解除された後も、2001年にハワイで客死するまで、事件について多くを語らなかったため、西安事件の事情について不明のままになった事柄も多い。一方中国共産党から見れば、張学良は、国民党に追いつめられていた共産党を救った救世主であり、「愛国精神」の大義のために大きな働きをした英雄として扱うに十分な要素を見出すことができる。この記念館を重要拠点として扱うゆえんであろう。

3-3. 楊虎城紀念館「止園」

楊虎城は、西安の地方軍閥で、西安事件当時第17路軍総指揮であった。共産党の勢力拡大を望んでいたわけではないが、蒋介石による剿共作戦には批判的で、張学良とともに事件を起こすことになる。日本での知名度は必ずしも高くないが、中国では張学良とならび、共産党の窮地を救った人物として知られており、止園も西安事変紀念館と並ぶレッドツーリズム拠点と位置づけられている。

楊虎城は事件の後、一時国外に逃れ、日中戦争の勃発の際に帰国したところで、捕らえられて監禁される。12年間の監禁生活ののち、家族や秘書とともに重慶で処刑されている。館内には、楊虎城の事件前の資料が展示されているが、楊虎城もまた、張学良と同様に、愛国者であったことが強調されている。



楊虎城紀念館展示：
楊はいわゆる地方軍閥であるが、「革命に身を投じた」という表記になっている。
(2018年9月房文慧氏撮影)

3-4. 八路軍西安弁事処

西安事変紀念館、楊虎城紀念館とならぶ、西安市内の西安事件関連の施設として、八路軍西安弁事処がある。2018年9月の調査ではスケジュールの関係で訪問できなかったが、主要なレッドツーリズム拠点として挙げておきたい。1936年に設置された当時は、西安における中国共産党の秘密拠点であったが、国共合作が成立した後、延安を本拠とする八路軍の出先機関となったとされている。

西安観光で人気を誇るのは、西安事件のような近現代の歴史スポットではなく、さらに時をさかのぼり、兵馬俑（秦の始皇帝陵の副葬坑で、7,000以上の等身大の武士と馬の俑（人形）が発掘されている）などが展示されている秦始皇兵馬俑博物館である¹²⁾。

西安市内のレッドツーリズムの拠点のうち、西安事件の舞台となった華清池は郊外にあるが、それも兵馬俑と比較的近いエリアにある。日本人観光客の兵馬俑訪問にあわせて、華清池及び五間廡を訪問することができる。秦始皇兵馬俑博物館は、レッドツーリズム関連の史跡とはいいがたいが、重点愛国主義教育基地に指定されている。

4. 延安におけるレッドツーリズム

延安は陝西省北部に位置する都市で、日本人が観光で訪れることはほとんどないが、中国共産党が長らく拠点としていたこともあり、知名度は高い。中国共産党は、1935年10月に長征を終えた後、陝西省を拠点とし、1937年に延安に拠点を置く。その後1947年まで共産党の拠点となっている。西安からの距離は250キロほどで、高速鉄道で2～3時間かかる。先に挙げた100大レッドツーリズム拠点紅色観光地（經典景区）として、延安市延安革命紀念地系列景区が指定され、延安革命紀念館、中共中央西北局紀念館、延安新聞紀念館などがリストアップされている。このほか、棗園革命旧址、楊家嶺革命旧址、王家坪革命旧址、鳳凰山麓革命旧址もよく知られている。

辻田真佐憲は、講談社の「現代ビジネス」ウェブサイトで、レッドツーリズムの拠点を訪問したレポートを発表している¹³⁾が、その中で延安革命紀念館についても紹介している。辻田によれば、延安革命紀念館は1950年にオープンしたもっとも初期の革命記念館で、2009年に建て替えられたとされる。2016年当時の展示は、展示室の広さに見合う展示がまだ用意されておらず、「観客を引き付ける工夫にも乏しい」という。

革命の根拠地であった延安にはこのほかにも多数のレッドツーリズム観光地があるのだが、西安との大きな違いは、レッドツーリズム以外の観光資源が乏しいという点だ。トリップアドバイザーにリストアップされている観光地も、半分程度はレッドツーリズム関連のスポットである¹⁴⁾。中国の人々はみな、レッドツーリズムへの関心が高いかという点、少

なくとも個人差はあるようで、学校教育で叩き込まれた内容を「観光」で学ぶ気にはならないという若者も多いという話を、今回の調査に同行した中国人留学生から聞いた。中高年世代にとっての見え方はまた違うかもしれないが、レッドツーリズムは、「政治的」で「難しい」テーマと感じる人もいるようだ。さらに日本人の場合には、近現代の中国の歴史について一定の理解がなければ、展示内容を理解することは難しく、まして、中国政府がレッドツーリズムの拠点において何を強調し、プロパガンダを行っているのか、客観的にとらえるのは不可能だ。レッドツーリズム拠点ばかりが集中し、地の利もよいとはいえない延安は、「革命の根拠地」というブランドがあるものの、日本人が訪れやすい導線を設計しにくい環境にあるようにも思える。

5. 漢中市洋県におけるレッドツーリズム

漢中市洋県は、陝西省南部の都市漢中の県の一つである。人口40万人強と、中国の町としては小さな規模だが、1999年に洋県から新潟県佐渡市に、朱鷺を提供したことで知られている¹⁵⁾。

西安市内から洋県までは高速道路で3時間弱、途中で秦嶺山脈を抜けるため、西安とはかなり気候が異なり、気候や文化は四川省に近くなるという説明を受けた。洋県の朱鷺保護センターでは佐渡市だけでなく、出雲市などいくつかの日本の自治体との交流が進んでいることが見て取れたが、『朱鷺外交』が日中関係を改善させた¹⁶⁾あるいは「両国関係の礎となっている」というような記述は見られなかった。また、洋県近郊の秦嶺山脈により近い場所に、華陽鎮自然保護区があり、こちらでも、朱鷺の保護活動に取り組んでいる。このほか、パンダ、金絲猴（キンシコウ、孫悟空のモデルとされる）、ターキン（羚牛）の保護にも取り組んでいる。ただし、日本から洋県を訪れる人もそう多くはなく、日本人向けのレッドツーリズムの導線として、朱鷺や自然保護区を想定するのはまだ困難がある。

5-1. 工農紅軍第二十五軍司令部跡

前述の華陽鎮自然保護区内では、電気駆動の大型カートで移動するのだが、この自然保護区の中に、工農紅軍第二十五軍司令部跡がある。紅軍というのは、1937年に国民政府指揮下に入る前の共産党軍の名称で、その二十五軍の拠点が秦嶺山脈の山あいにならされていたことになる。司令部跡は、広い敷地の邸宅の中にあり、村に住む豪農の家を接収して本拠地としたことがうかがわれる。1935年3月8日、紅二十五軍は華陽に入り根拠地を建設、遊撃戦を展開して、国民党を撃退したとされる。当時の軍長は程子華、副軍長は徐海東、政治委員は呉煥先であった。本拠地は土壁の高い塬で覆われているが、そこには、「只有参加紅軍，穷人才有饱饭吃（紅軍に参加すれば、貧乏人も十分に食べることができる）」という文字が書かれている。中国共産党が

農村で組織を作っていく際に、きわめて現実的なメッセージを発していたことが想像できる。また、中の展示には、当時の装備品があり、かなり旧式と思われる銃が展示されていて、装備が十分ではない紅軍が、十分な装備を持つ国民党軍と戦っていたことを想起させるものであろう。

敷地の外側には、徐海東の像が設置されている。徐は華陽を本拠とした時期の戦いでも戦闘の指揮を取り戦果を挙げたとされる。その後も軍人として活躍、中華人民共和国建国後も中央委員をつとめ、人民解放軍の大將となるが、文化大革命で迫害され、1970年に死亡している。華陽で指揮を取った後も党中央で長く活動した経歴から、現代に連なる中華人民共和国の歴史を体現する人物として、位置づけられていると見るべきだろう。2017年12月に中国中央電視台は、「国家記憶 徐海東と紅二十五軍」というドキュメンタリー番組を2回に渡って放映している¹⁶⁾。

注意すべきは、「長征の足跡」という観点で見たとき、紅軍二十五軍の足跡は、必ずしもメインストリームではなかったという点である。長征が、中国共産党に勝利をもたらす重要な歴史的意義を与えられた背景には、指導者である毛沢東の偉大さを強調するという意義があり、その結果、いくつかの経路で移動する複数の紅軍のうち、毛沢東が指導者として活躍した第一方面軍の経路が、たどるべき足跡だとされてきた。しかし現在はこのように、二十五軍の足跡である司令部跡も、拠点としての整備が行われている。



「只有参加红军，穷人才有饱饭吃
(紅軍に参加すれば、貧乏人も十分に食べることができる)」
(2018年9月筆者撮影)



紅軍が使用していた銃
(2018年9月筆者撮影)

5- 2. 紅軍林

紅軍第二十五軍司令部跡からさほど離れていない場所に、3人の革命志士が立つ像がある。紅軍がこの地に松を植えたものが大きく育ち、人々がこれを「紅軍林」と呼んでいるという説明であった。正面には「紅色記憶」と書かれており、側面と背面には、毛沢東直筆の文章と習近平直筆の文章が刻まれている。



正面には「紅色記憶」
(2018年9月筆者撮影)



背面に刻まれた毛沢東の言葉
(2018年9月筆者撮影)



側面に刻まれた習近平の言葉
(2018年9月筆者撮影)

今回の調査では、漢中市洋県の朱鷺関連施設及び自然保護区とレッドツーリズムの運動可能性を検討した。華陽鎮の自然保護区は、西安からの交通が便利な場所とはいいいがたい。平日に訪問したこともあって、訪問客はまばらであった。中国の都市部の喧騒を離れ、珍しい動物に出会って自然に親しむという需要が、全くないということもないだろうが、現代中国人にとってさほどの人気エリアのように見えなかった。一方日本人観光客にとっては、中国の遺跡や歴史的建造物を訪ねて、「悠久の歴史」に触れるのが旅のメインであり、自然保護区をたずねるといのは、あくまでも「オプション」ということになる。滞在期間の短い通常の観光客にはややハードルが高い。中国のレッドツーリズムは、中国共産党の歩んだ道のりをたどるものであるから、その中には当然「長征」のような山村部での苦難を知るプロセスが含まれる。今回訪問した洋県華陽鎮の各レッドツーリズム拠点は、山村に位置し、その趣旨にかなうものである。しかし、交通アクセスの悪さはいかんともしがたく、外国人観光客はもちろんのこと、中国人の訪問客もほとんど見当たらなかった。

おわりに

本稿では、2018年9月に実施した中国陝西省での調査に基づいて、陝西省におけるレッドツーリズムの可能性を検討した。最後にこれらのレッドツーリズム拠点をめぐることが、「戦争や災害をはじめとする人類の悲しみの記憶を巡る旅」であるダークツーリズムに変換可能かどうかを検討してみたい。

陝西省は、革命根拠地の延安があると同時に、省都西安には、歴史的建造物や遺跡を多く有しており、レッドツーリズムを含めた観光を組み立てやすい状況にある。特に西安は、兵馬俑を始めとする観光資源が豊富であると同時に、西安事件という、関心を向けやすい事件の舞台を多く観光拠点として整備している。近現代史のやや込み入った史実に関心を持っていないければ、日本人にとって西安事件の背景はやや理解が難しい。しかし、日中戦争の展開にも影響を与えた事件であり、日本人が「自分ごと」としてとらえることも可能な事件ではある。西安での展示は、中国共産党の視点からまとめられているが、西安事件は国民党から見れば、のちの国共内戦で共産党に破れて台湾に逃れることになる遠因であり、現在まで続く中台の分裂構図も、西安事件がなければ存在しなかったということになるだろう。このように考えると、西安のレッドツーリズムは、20世紀の「中国革命」のさまざまな経緯がもたらした戦争とその犠牲、さらには今日の「中国」の分断について、思いをめぐらせるに十分な「普遍性」を持っている。国共内戦の結果にも少なくない影響を与えた、当時の日本の立場からすると、日本からの旅行者にとっても、「ダークツーリズム」としての要素を十分に含んでいるように思われる¹⁷⁾。

西安を中心に省内周辺地域への観光を組み立てるとすれば、北部の延安、南部の洋県、

いずれもアクセスの難しさのわりに、レッドツーリズムの「見どころ」のインパクトは弱く、ギャップがあるように感じられる。特に洋県については、華陽鎮の紅軍第二十五軍の拠点を訪ねるまでの関心を、日本人が持つのはやや困難があるだろう。そもそも多くの日本人にとって、中国のレッドツーリズム拠点をたずねる目的は、「中国共産党による建国の歴史をたずねる」という中国人にとってのそれとは異なる。「中華人民共和国建国前後の歴史はどう伝えられているか」を、やや引いた位置から観察する者が、日本人では多数派を占めるはずだ。紅軍の歴史にさほど詳しいわけではない日本人が、いきなり華陽鎮を訪ねたとしても、どこにプロパガンダの要素を見出すべきか、ほとんど見当がつかない。一方今回の調査に西安から同行してくれたガイドは、かなり事前に情報を収集してくれていたが、そもそも華陽鎮を訪れる経験もあまりないようで、まして日本人相手にレッドツーリズム拠点を案内するのは初めてだといっていた。

延安は、中国のレッドツーリズムでもっとも重要な都市の一つであり、拠点の整備も進んでいる。今回調査に含めることはできなかったが、紅色観光ルートとして「西安－洛川－延安－子長－榆林－綏徳」がモデルコースになっており、市内に定番のレッドツーリズム拠点もあることがわかっている。次回以降の調査対象として検討したい。

中国のレッドツーリズム拠点は、12の重点紅色旅遊区と30のモデルコースの中に点在しており、それ以外にも全国各地に無数に存在する。本稿では、西安を中心とした陝西省のレッドツーリズム拠点の一部を調査した結果を検討したにすぎない。レッドツーリズム拠点は、中国国内において、「革命」の歴史がどのように解釈されているかを知る最適の素材といってよいが、やや難易度が高く、日本国内ではあまり注目されていない。それぞれの拠点で起きた史実は、当然中国共産党や中華人民共和国の「現在」に連なるものであるが、そこにダークツーリズムとしての「悲しみ」が含まれていることは多い。この点について、日本で学びを深めて補助線を引いてからでかけていけば、中華人民共和国をより深く知る旅を構築することはできるように思われる。

本研究は JSPS 科学研究費 補助金 (科研費) 18K12000 の助成を受けたものである。

註

- 1) ダークツーリズムについては、井出明『ダークツーリズム 悲しみの記憶を巡る旅』(幻冬舎新書、2018年)、井出明『ダークツーリズム拡張—近代の再構築』(美術出版社、2018年)。
- 2) 西安観光の政治的側面については、松田徹「中国西安の観光と政治性」中国研究 20 卷、2012 年。
- 3) 百武仁志「レッドツーリズムとは何か」日本国際観光学会論文集第 22 号、2015 年。
- 4) 張恩華「中国の『紅色旅遊』—共産主義から消費主義へ、革命から余暇へ」中国 21 Vol.29、2008 年。
- 5) 張前掲論文、163 頁。
- 6) 李明伍「中国における『持続可能性』と観光の展開」和洋女子大学紀要 第 59 集、2018 年。
- 7) 張前掲論文、166 頁。
- 8) 李前掲論文、55 頁。張恩華は一方で、レッドツーリズムの目的として「革命老区」と呼ばれる、1945 年以前の革命根拠地のエリアの地域振興が掲げられる一方で、実際には「老区」によって指定される拠点は半分にも満たなかったという矛盾を指摘している。張前掲論文、169 頁。
- 9) 中紅網—紅色旅游网 < <http://www.crt.com.cn/> > (2019 年 1 月 28 日最終アクセス)。中紅網については、張恩華が解説しているが、それによると、北京にある報道機関の一つが、レッドツーリズムの発展に注目して開設したポータルサイトで、レッドツーリズムに関連する最新ニュースを継続的に報じている。張前掲論文、170 頁。
- 10) 調査は、2018 年 9 月 9 日—15 日にかけて、共同研究者である本学教授の房文慧教授、その他同行した同僚及び学生とともに実施した。西安市内調査のほか、洋県及び隣接する長青華陽景区を訪問した。本調査に関する房の研究成果として、房文慧「環境問題と観光振興について—新瀋陽省遼寧省「トキを巡る」環境ツーリズムと関連して—」敬和学園大学研究紀要 27 号、2019 年。
- 11) 辻田真佐憲「年間 10 億人動員！中国「レッドツーリズム」に参加してみた」(現代ビジネス) < <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/48536> > (2019 年 1 月 31 日最終アクセス)。
- 12) 1974 年に地元住民が井戸を掘ろうとして土を掘っていた際に、破片が発見され、掘り進むうちに人間大の人形が発見されたのが、兵馬俑発掘のきっかけとされている。最近まで博物館には、第一発見者の楊志発氏が常駐し、来館者にサインをしていたといわれるが、今回はその事実を確認することはできなかった。
- 13) 辻田前掲記事。
- 14) 「延安市で絶対外さない観光スポット 10 選」(トリップアドバイザー) < https://www.tripadvisor.jp/Attractions-g528735-Activities-Yan_an_Shaanxi.html > (2019 年 1 月 31 日最終アクセス)。
- 15) 洋県を始めとする中国のトキ保全活動については、これまでの経緯から、経済発展に伴うさまざまな困難が発生している現状まで、蘇雲山及び河合明宣による一連の研究が詳しい。たとえば、蘇雲山・河合明宣「中国におけるトキ保全事業の新たな進展—再導入によるトキ分布域拡大と社会・自然環境課題を中心に—」放送大学研究年報 33 卷、2016 年。
- 16) 「《国家记忆》20171225《徐海东与红二十五军》第一集 绝地突围」 < <http://tv.cctv.com/2017/12/25/VIDE51WcfPkA3MTCKiDidS0G171225.shtml> > (2019 年 1 月 31 日最終アクセス)。
- 17) ゴルゲ事件で死刑となる尾崎秀実が、近衛文麿の私的顧問として徴用されるようになったのは、西安事件の見通しを正確に予測したことがきっかけだといわれる。尾崎は、コミンテルンからの情報により、蒋介石の生存や国共合作の見通しを持っていたという。尾崎の著作にも、西安事件に関わる「ダークツーリズム」への導入口があるように思われる。当時の尾崎の著作をまとめた出版物として、米谷匡史編『尾崎秀実時評集：日中戦争期の東アジア』(平凡社、2004 年)。